

■ショパン: 24の前奏曲/前奏曲作品45/同変イ長調

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 この人はCDを作るにあたって、多分、けつして衝動的には動かず、あくまでも作品を練り抜いた上で、得心の行くものだけを世に送ろうとするタイプなのに違いない。つ



藤原由紀乃(P)
[SPEXDOVCX00013]
¥3000

くづくそう思わせるまでに、このたびのショパン《24の前奏曲》も、見事に高水準を買った演奏である。第1番からして実感できるところだが、このピアニストは前奏曲のひとつひとつに起承転結を施し、無理のない「ストーリー」を与えることが上手である。いや、それは「演奏設計」というより先に、もつと感性的な、作曲家との「心の呼応」がなせる業なのかもしれないが……。ともあれ、藤原由紀乃のショパンは、聴き手が信頼とともに心を預けることのできるショパンである。テクニカルな見地から安心して委ねられるというだけではなく、思うぞんぶん、情緒に浸らせてくれるショパン。しかも誇張のない演奏スタイルにより、万人に納得のゆく方法で、この作曲家の持つ稀な歌ごころのすべてを聴かせる。神経質ではないが濃やかな心遣りに満ちた演奏は、とりわけ第11番、第13番、第15番、第17番など、叙情美のきわ立つ曲目において最上の姿を見せる。もとより、それらの合間をつなぐ急速な楽曲のダイナミックにすら響く指さばきの俊敏さがあつてこそ、叙情が真に生かされるのだが。なお余白には、もうひとつの出版された前奏曲である嬰ハ短調作品45と、未出版のまま遺作となった変イ長調のそれも収録されている。

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 藤原由紀乃によるショパンの24のプレリュード。以前から、日本のピアニストのなかでもこの人は違うなと思っ

ていたが、このショパンを聴いてますますその思いを強くした。彼女が幼い頃からシュタートウラー女史のもとで身に着けたというツィーグラー・メソードがどのようなものか具体的に知らないが、邦人に限らず、これだけ深く温かくて存在感のある音色を持っている人はそうはいないだろう。困るのは、このCDを聴いた後では他のピアノリストの音が物足りなく思えてしまうことだ。さて、このショパン。まず、柔らかくて深く、聴き手の心にじわりと沁みこんで来る音がすばらしい。フォルテの速いパッセージもしつかりと音の中心を捉えている。その演奏は細部にいたるまでしつかりと弾かれて、技術的な安定度も抜群だ。しかも、どのフレーズも洗練されていて、悠然としてすでに大家の風格がある。時に情念の表出でかなり激しい一面を見せて驚かせるが（たとえば第18番）、解釈についていえば、特に目新しいもの、際立つて個性的といえるものはない。しかしそれは音楽の外面的なことに過ぎない。こうしたことは彼女の目指すところではないのだろう。ロシアのテクニクを身につけたドイツ人のピアノリストが、完璧な音が得られれば解釈はどうにでもなるというようなことを語っていたが、誤解を恐れずにいえば、このショパンもそれに通じるところがある。では、「完璧な音」とは何か。おそらくそれはメソードやスクールによつてさまざまだろう。そして、そのひとつの答えをこのディスクに見つけられるに違いない。

神崎一雄 ● Kazuo Kanazaki

「録音評」 ステージ中央に置かれたピアノからホールいっぱいに広がって行くサウンドがイメージされる録音。どこにも強調感のない自然なピアノ・サウンドのイメージであり、クリアであつてのびやかさがあるのが印象的である。ピアノには豊かすぎると思え、残響豊かなホールでの収録だが、ピアノのアタックは明快に捉えられている。2004年12月、埼玉県松伏町の田園ホール・エロ―ラでの相澤昭八郎による収録。